慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済生学の研究方法に就て
Sub Title	
Author	勝田, 貞次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.6 (1928. 6) ,p.759(43)- 777(61)
JaLC DOI	10.14991/001.19280601-0043
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280601-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟生學の研究方法に就て

勝田貞次

一　經濟の研究法

「素材なき概念は空虛であり、概念なき素材は盲目である。」と稱して、カントは材料と理論との關係をば純然たる相關々係に於てのみ見たのであるが斯るカントの見解を以てする時は材料と理論との關係は鷄と卵子との關係の如く互に他を豫想しあつて限りがないことになり、吾々の毎日やつて居る認識の歩みを說明し得なくなると思ふ。要するに材料と理論とに關するカントの解釋は間違つては居らぬにしても餘りに形式的に過ぎて實際的効果がないのである。そこで實際に認識をやつて行かねばならぬ吾々としては材料と理論との間の相關々係をばもつと具體的なものにして行く必要がある譯である。

私は斯ふした立場に立つて材料と理論との關係を考へて見た結果材料と理論との關係には二種のものがあることを發見したのである。即ちその一は理論からして材料が引出される場合であり他は材料からして理論が引出される場合である。世人がよく認識の二途として演繹と歸納とを擧げるのも以上のことを暗示するものに外ならぬ。即ち理論から材料が引出されてくる場合は演繹であり反

之、材料から理論が引出されて來る場合は歸納である。カントの考へ方からすると演繹と歸納とは互に他を豫想するもので兩を各々獨立のものとすることは出來ないのであるが私は人間の認識作用にはどうしても理論に出發點を求める處の演繹的なものと材料に出發點を求める處の歸納的なものとの二があつて前者が自然科學の認識を生み、後者が文化科學の認識を生むものと考へざるを得ぬのである。

斯ふした私の考へには反對される方が多いことであらうが然し吾々は自然科學の構成に際して、根本觀念を先づ頭に浮べてそれをば漸次材料を征服し得るように複雜化して行くことを經驗するではないか。反之、文化科學の構成に際しては純粹の材料に接しようとする直觀的な態度が先づ起つて來てそれからして、漸次材料の整理が始まりその結果として、理論なるものが作り上げられることを經驗するではないか。だからして私は自然科學の場合には認識作用は演繹的であつて理論からして材料を複雜化して行くけれども文化科學の場合には認識作用は歸納的であつて、理論は常に先づ材料を受け入れてからその受け入れた材料を整理することに依てのみ生ずるものであると主張せざるを得ぬのである。斯くてまた自然科學の場合にあつては材料を捕へるよりも理論を頭に浮べることの方が問題であり反之、文化科學の場合にあつては理論を作るよりも材料を捕へることの方が問題であつて一度材料を摑へて仕舞へばそれからして、理論を引出してくることはさのみ骨の折れることではないことになる。

ぢあ、なぜそうなるのであらうか。想ふに夫は自然科學はベルグソンの云ふ樣に實在の利用を作るものであつて從て極めて人爲的の工夫を要するが文化科學は實在の實相を如實に描き出すだけのものであつて從て夫は極めて記述的のものだからである。現に見よ。物理學の理論は自然をば人類の利用に適するように曲げて見ようとする澤山の工夫に充たされて居るけれども反之、經濟學になると、資本主義は勞資の對立と鬪爭とを必然にもち來すものと云ふが如き極めて實現直視の理解で充たされて居るではないか。だからして經濟學などにあつては、經濟現實を摑へることが問題であつて夫さへ摑へて仕舞へばそれから理論を引出してくる位いは大したことでないことが分る。

從て經濟の研究に際しては經濟理論を作る前に先づ以て經濟現實を如何にして理解す可きかが問題とならねばならぬのである。處がどうも世人はこの點を悟らぬ。そして經濟の研究をば一般性をもつた觀念から計り始めようとする。そして演繹法を推奬する。

けれども自然科學と違つて經濟學では演繹法は駄目である。是れ、演繹法には利用觀念が多分に這入つて居つて演繹法は爲めに現實の相をありのまゝに把捉せしめようとしないからである。反之歸納法には自からを空うして實在の眞相を把捉しようとする氣持が多分に這入つて居るからして、文化科學はどうしても歸納法によるのが一番である。

ぢア今迄この歸納法を主張した學者が澤山あつたが、夫等が皆失敗に終つたのはそも〳〵どう云ふ譯であつたのか。想ふに夫こそ大問題であつて私の見る處では今迄の歸納論者の失敗したのは歸納法の根本をなせし處の現實把捉の方法が不完全であつたからだと考へられる。寧ろ、今迄の歸納論者は現實の實相

を把捉する方法を採用しないで却つて現實を矯めて見んとする處の演繹法をばひそかに歸納法の出發點に置いてそれでもつて初手からして、現實の實相をば如實に把捉しようとしなかつたからだと考へる。だからして私を以てすれば現實の實相をありのままに把捉し得るような純粹なる歸納法さへ可能ならば慥かにそれにて問題は解決されるものと考へるのである。

然るに今迄は斯る純粹なる歸納法などは、テンデ考へられもしなかつた。何とならば、こんな純粹なる歸納法は一種の直覺法であつてそれは實證を伴はず從て形而上的なものとなり科學的認識の構成法とはなり得ないと深く考へられて居つたからである。そしてなるほど一寸考へると夫は無理ではない。

が然しよく考へて見ると純粹直觀から出發するが故に科學的要求を滿足し得ないとは限らぬと思ふ。是れ外的に實證されないでも內的に心證されることが可能だからである。寧ろ私は眞なる直觀は必ずや眞なる內證を伴ふものであるからして直觀にも實證がないとは云へないと思ふ。直觀の實證は外證でなくて內證であるに過ぎぬのである。從て、吾々としては直觀によつて現實相を生々と把捉し來るその能力に應じて歸納的なる文化科學一般は成立し來るものと思はざるを得ぬ次第である。

現に經濟學の開祖たるケネーを見よ。彼は經濟的實在の一角をば經濟循環として直觀し得たればこそ經濟學の基石を築き得るに至つたのではないか。同樣にしてアダム・スミスにしても、マルクスにしても、見ように依つては皆な夫々に、經濟的實在の一角をば直觀し得た人々であつて經濟觀念からして經濟理論を打建てられる人々ではないと考へられる筈アないか。

そこで、吾々は經濟學の研究法はどうしても之を歸納法に求めると共にその歸納法の依つて立つ基礎をもベルグソンの云ふ樣な內から生かして見ようとする知的同觀に求め、依つて以て歸納的自體をば純粹なるものとしなくてはならぬと主張せざるを得ぬのである。換言すれば歸納法は即ち直觀法であつて此の直觀法によつてのみ經濟學の如き文化科學は可能となると主張せざるを得ぬのである。

二　經濟研究法の三種

今ベルグソンの云ふ處に從ふと、彼は先づ實在に對する見方をば、二つに分けて居る。即ち立場を外に措いて外部から逆に冷かに見て行くかそれとも立場を內に措いて、內部から共に流れ乍ら同情を以て見て行くかの二つに。そして、ベルグソンは前者を殺して見る立場、後者を生かして見る立場と云つて居るが尤もだと思ふ。またボルツァノーに依れば前者は機械觀の立場であり後者は有機觀の立場であるとされて居るがそう見ても同じことであらう。だから詮り、見方なるものには外からして殺して見る機械觀的なものと內からして生かして見る有機觀的なものとの相反した二個のものがあると云ふ譯になるのである。

然らば、以上二つの立場は實際上は如何なる相違をもつのであらうか。問題は之であるがベルグソンや西田幾太郎博士の主張に依ると外からして殺して見る機械觀的の立場は結局實在の利用價値を作り上げるもので所謂理論とか概念とかが之である。反之、內からして、生かして見る有機觀的

の立場は結局實在の如實を作り上げるもので所謂現實とか體驗とか生の流れの記述とかが夫である。詮り、外的立場は概念的理論に赴き內的立場は現實的體驗を來すと云ふにあるのである。そして、私はこのことを承認せんとするものである。

處が茲に見遁すことの出來ない一事である。それは外でもない。同じく實在の概念化にも實在に逆行せんとするたちのものとその反對に實在に逆行しないで只その複雜相を簡略にする必要上實在に順じて夫を要約せんとするたちのものとの二種あることである。前者は實在の因果法則的概念化であり後者は實在の相互作用的概念である。

同樣にして、また實在の實相を生かしてありのまゝに把捉しようとする直觀的見方にも實在の流れにピタリと即するものと實在の流れに稍逆行せんとする態度に出るものとの二種があるのである。前者は實在の本質的直觀の場合であり、後者は實在の形式的直觀の場合である。

そこで今、以上のことを表記して一覽に供すると左の如くなるのである。

外的見方＝實在の概念化〔利用的概念化 / 要約的概念化〕

內的見方＝實在の直觀〔形式直觀 / 本質直觀〕

そこで、先づ右の表に記されたる四種の見方の實際の場合をば、一々說明するならば先づ第一の外的立場に立つ處の因果關係的見方なるものは俗に所謂自然觀と稱せられるものであつて、最も徹底せる外的立場である。純粹の自然科學者は皆な此の研究方法に據れるものゝ如くである。

第二の外的立場からの相互作用的見方は所謂發生觀なるものにして、生物學者が進化論を研究したり天文學者が宇宙の由來を研究したりするに用ゐられるものである。またヘーゲルのテーゼ、アンテーゼ、シンテーゼの說もかかる研究方法の一種と見る可く、マルクスの唯物的社會觀もまた斯る研究法に類するものである。

第三の內的立場からする逆行的見方は所謂形式主義的認識方法であつてリッケルト一派のものが夫である。

第四の內的立場による純直觀的見方は所謂現象學的認識方法に屬しベルグソン、フッサール、ゴットルなどの研究方法が夫である。そして之こそは經濟學の研究方法なのである。是れ若しも斯る研究法を以て經濟を研究せざれば經濟は文化現象とならないで自然現象となるからである。

然り經濟に限らず苟も文化に對して研究をなさんとする以上は文化を文化として認識せしめ得るような生かして見る有機觀を採ることが必要である。然らざれば文化の認識は消えてなくなり、文化も即ち自然と何等異らざることになるからである。生の現象は物の現象と一致して仕舞つて生が物に依つて支配せられるとしか思へなくなるからである。

そこで吾々はどうしても、文化に對しては「內的の見方」即ち第三と第四の研究方法しか採れないことが判るのであつて此の點から見て私はマルクスの研究方法は間違つて居ると主張せざるを得ぬのである。是れマルクスは文化の一種である處の經濟をば第二の研究方法に依つて機械的進行とし

て見て居るからである。然りマルクスが經濟と物とを同一視し社會の基礎を唯物的に見て居たことはマルクスの研究方法の反射に過ぎぬのである。反之、私は社會の基礎は經濟ではあつてもその經濟は決して「物」ではないと思ふ。寧ろ、物としての經濟でなくして「生」としての經濟こそ眞の經濟であり、それが利益社會の基礎をなして居るのであると私は思ふ。是れ經濟をば物として見るならば經濟の進行は自然現象化されて機械的必然的となり經濟を經濟として說明することが出來なくなるからである。要之、私を以つて見ればマルクスの研究方法は人間を自然現象として見て、人間は必ず死するものであると主張するのと何等異るものでないと思ふのである。詮り、文化を自然化して必然的機械的進行として見たことに就ては何等の異議もさし挾み得ないとしてもそれでは文化が泣きはせぬか。それでは人間が泣きはせぬか。人間を以て自然的に見て、人間をば、生れて食つて死ぬものと必然的に考へることは果して生きた人間を理解したことになるであらふかと云ふのが私の見解なのである。

而して、同樣なことは經濟に就ても云はれ得るのである。即ち、資本主義經濟を以て資本階級と勞働階級との成立、鬪爭、死滅の經過にすぎぬと見るマルクスは要するに資本主義經濟の必然的なる外貌のみを大摑みに見てその內面的なデリカシイ、內部に沸き返つて居る生命の流れ、を看過して仕舞つたものと見る可きではあるまいか。

そこで、勢ひ吾々はマルクスの如く第二の研究法をば經濟の研究方法とすることに反對せざるを得ぬのである。然らば第一の研究方法はどうかと云ふにこれも勿論問題にはならない。何とならば第一の研究方法をば經濟の研究方法とするならば經濟と慾望とを同一視して經濟學を慾望學としてしまふ場合もあり得るからである。メンガーの經濟學は正にこの種のものであつたのである。

そこで殘る處は第三と第四である。然らば先づ第三はどうかと云ふと、第三の研究方法を以てするならば經濟をば內面からして生かして見ると同時にその生ける經濟の流れをば逆に因果關係に攝取して見ようと云ふのだからして、經濟に對する概念が構成されることになると思はれる。他言すれば經濟理論が出來上るのである。斯くて第三の研究法は理論經濟學の構成方法であると結論す可きではないか。

處が第四の研究方法は經濟をば內面からして生きものとして生かして見て、その生きる作用をば如實に體驗し之をば記述せんとするのであるからして、經濟現實の理解へと吾々をば導くものと考へられる。從つて第四の研究方法は經濟の動きを如實に吾々に暗示する處の所謂經濟動態の研究方法なりと見ることが出來ると思ふ。

而して斯る經濟動態の研究方法こそ經濟理論の研究方法の基礎をなすものである。詮り第四の研究方法に依つて經濟動態を理解したる上で吾々は始めて第三の研究方法に移つてその經濟動態をば經濟理論へと構成す可き順序であると主張するのである。

處が學者の中には、經濟動態の研究方法をば斯る內面から生かして見ると云ふ處に求めようとしない徒らに均衡とか正常とか云ふが如き抽象的に假構されし概念に基いて空に經濟動態をば理論的に說明しようとするものが多い。乍然斯る經濟動態は經濟動態の理論に外ならないものであつて、

經濟動態夫自體の理解ではない。また斯る理論に依つては決して經濟動態を捕捉することは出來ないのである。經濟動態を捕捉しようと思へば經濟をば生きものとして直觀的に理解するより外はないのである。均衡とか正常とか云ふが如き先天的なる觀念を先づ豫想して斯る觀念からして動態經濟を理解せんとするのは動態經濟を靜態經濟（即ち理論經濟）として見んとするものに外ならず動態經濟夫自體を見ようとするものでないからして不可だと思ふのである。然り理論經濟は已に得られたる處の動態經濟の理論化的產物に過ぎないのだから斯る理論經濟の理論からして根本である處の經濟動態が理解されざるは當然なことである。從つて吾々としては理論經濟を作り上げる前にその本源たる經濟動態の捕捉をなす必要があることを知る。世人はこの逆に經濟理論からして經濟動態に行かんとする。私の反對せんとするは茲であつて私はその逆を主張する。即ち先づ以て動態經濟を捉へてから夫からして理論經濟へ行く可きであると。

要之、經濟の研究は三段になる譯である。即ちマルクス流に經濟をば第二の方法からして極端に概念化して結局人は生れて食して死すと主張するようなやり方と、それからして、正流學派の如く第三の方法を採つて經濟動態をば形式化して經濟の進行する經過をば概念化するものと、それからしてゴットルの如く第四の方法を採つて經濟動態をば經濟動態としてWirtschaft als Lebenとして如實に捕捉し、現實の經濟の實相を記述し描寫しようとするものとの三段になると見ることが出來よう。

只茲に吾々の夢にも忘れてならぬことは、以上のうちの第一段と、第二段とは共に、第三段からの抽象に過ぎないもので從て第三段の認識に觸るゝことなくしては第一段や第二段の認識は成立し得ないと云ふことである。他言すれば動態經濟に觸れることなくしては理論經濟は可能とはならぬと云ふことである。

されば之そ私は經濟の研究は個性の調査から始めて定型の理解へと行く可きものであつて、マクス・ウエーバーの云ふが如き普遍的な定型を假想しでそれからして個性の調査に逆行することは駄目だと考へる次第である。これ私が經濟研究方法として個性の調査、定型の理解を云々する所以である。そして夫を逆にして定型の假定個定の類推をば否定せんとするのである。

從つてまた私の茲に云ふ處の定型は決して、普遍性を有するものでないのである。夫は有機組織化されたる多くの個性に外ならぬのである。吾々は生ける經濟の姿を見ようとする第四の方法によつて動態經濟の流れのうちに入りそこで發見する處の種々の經濟個性をば漸次有機組織化して行つて經濟定型を建設す可きであつて斯る經濟定型の抽象化され概念化されしものこそ例の理論經濟に外ならぬのである。第二第三の研究方法は要するに已に出來上つた處の經濟定型をば抽象化し概念化する處の方法に外ならぬのである。

從つて要之、經濟の研究方法として吾々の云はんとする處は「先づ以て與へられたる材料をば第四の方法に依りて充分に體驗し受け容れそして味へ、それから後に、第二第三の方法によつて夫を抽象化し概念化す可きである」と云ふにある。「概念や觀念や理想型などをば假想して、それからして出發することは徒らに、抽象論に墮し、議論の遊戯に終るからして不可である」と云ふにあるのである。私がある。簡言すれば「先づ實物を見てそれからして何をでも理論を作れ」と云ふにあるのである。私が

經濟研究の方法として、特に内部からして、生きものとして、生かして經濟の生き行く作用を見よとか「先づ個性の調査をなして漸次定型の理解に行く可きであるとか、經濟動態からして經濟理論は作らるゝ可きものであるとか云ふに至れる所以も茲にあるのである。また實際に於ても經濟動態をば抽象化し概念化して結局(in the long run)の姿に於て見たるものが經濟理論なのではないか。

從つて經濟の研究法には第二第三第四の三種あるもその根本は第四にありと云ふ可きである。生かして現實の經濟に觸れんとする第四の方法こそは經濟研究の根本であると云ふ可きである。

と云つた處で動態經濟の研究者は即ち實際家ではないのである。是れ實際家は案外動態經濟を知らぬからである。寧ろ實際家ほど、動態經濟を抽象化したり極偏したりねじ曲げたりして見て居るものはないからである。反之眞の動態經濟の研究者は生きて動いてゐる經濟を見なければならぬ。生きものとして經濟を見なければならぬ。

動態經濟の動態と云ふ言葉は單に動くと云ふ意味ではない。夫は未だ、概念の枠に嵌められて固定化されたものでないことを意味するのである。ベルグソンの言葉に從へば動態は即ち、生態に外ならぬ。創造的進化に外ならぬ。從つて、また吾等の經濟生活をば一個の創造的進化として生きものとして見て行くにあらざれば動態經濟なるものには觸れ得ないのは當然である。吾々が動態經濟に觸れると云ふのは概念の枠に固化されない處の生まの生々した純粹素材としての經濟の姿を無感にて受け容れることに外ならぬのである。

そこで問題となるのはそうした受容れ方法如何である。

三　如何にせば生かして見れるか

吾々は以上に於て經濟學の研究方法は純歸納的な直觀的な方法であらねばならぬことを一言したが然らば此の直觀的の方法とは如何なる方法であるか。

此の點に關して參考になるのはベルグソンやゴットルの言である。ゴットルは經濟をば人間の行ふ經濟生活として見ないで經濟自體が生きものであるとして見よと云ふのである。そして生きものとしての經濟をば經濟研究の根本に措こうとするのであるがこれは確かに經濟をば直觀的に研究する好例であると思ふ。またミュンステルベルヒもその價値の哲學のうちにて人が山にトンネルを作ると見ないで山が人の努力を通じてトンネルまで自發自展すると見る時に山の直觀は成立すると云つて居るがこれなども、經濟の直觀的研究方法の一例とするに足るであらう。即ち吾々は統計を通じて經濟を見ようとしないで經濟が統計を通じて自己を發現しつゝあるように經濟をば見なければならぬ。之が經濟の直觀的研究である。經濟は見てから後に論ず可きものであつて論じてから後に見るものでないと云ふ場合のその「經濟を見る」見方は全く斯る直觀的方法に依る可きものである。そしてベルグソンこそは斯る直觀方法の偉大さを認めて居る大家であつてベルグソンは自身已に此の生かして見る見方をば實行して居るのである。尤も生かして見ると云つた處で甚だ抽象的であつて一寸分り憎いであらうからこれからして私は概念以前の生のまゝの經濟を攝取す可き方法について一言することにしよう。

先づ此の見方の一つの特徴は全的と云ふことである。茲に全的と云ふのは單に空間上に於ける「全

的」を意味するのみでなく時間的の「全的」をも意味するのである。但し時間的の全般は時間の流れを超越して時間をば永遠化して見ることではない。寧ろその反對に時間のうちに沒入して過現未に亘る全時間的繼續をば刹那のうちに攝取せんとすることに外ならぬのである。

斯ふ云ふと大變にむつかしいことを云ふように聞えるかも知れないが夫は決してむつかしいことではないのである。何とならば時間の眞の流れは常に過現未に亘る全實在をば刹那の一瞬間に込めて進みつゝあるものであつて吾々が毎日「生きて居る」と考へ得るのも吾々が已に斯ふした全時間の連續をば全的に把捉して居るからだ。同樣にしてまた斯ふ云ふ風に全時間的に經濟を把握した時に始めて吾々は「經濟は生けり」「生ける經濟に觸れ得たり」「生としての經濟」「現實としての經濟」又は「動態經濟」と云ふが如き感を得ることが出來るのである。從て空間的にも時間的にも全的に見ることが動態經濟の見方には必要であるのである。

次に動態經濟を見ようとする場合には決して概念に囚はれてはならぬ。出來る限り知覺を中心としなければならぬ。是れ動態經濟の研究が事情とか、統計とかを先づ集めることを先決問題とする所以である。然るに世人はどうも動態經濟を見ると云ひ乍ら、概念や理論を基礎として經濟事情や經濟統計を、かれこれ論議するのである。爲めに、動態經濟は彼等の指間から洩れ去るのである。反之、經濟事情なり經濟統計なりを澤山に集めて來て知覺の上で稍々想像力を活かしながらそれらをば、種々に比較したり組織立てたりして全的に見ようと努力せよ。然る時には必ずや經濟は生きものとしての姿を現し來るに相違ない。

從つてまた、概念を離れて全的に經濟を見ることは同時にまた有機組織化して經濟をば見ることに相當するのである。是れ經濟生活は夫自體已に一個の生命であつて、內的統一と無限の持續力とを有する一個の有機體に外ならぬからである。然り、經濟の眞の姿は必ずや經濟界と云ふ一個の有機體として吾々の眼前に現れざるを得ぬのである。カッセルも道破せる如く、斷定を一掃してありのまゝの經濟をば見るならば經濟は相互に作用し合ふ無限の連續であり無限の有機組織として考へられざるを得ないのである。從つて動態としての經濟、現實としての經濟、生きものとしての經濟は一個の有機體としての經濟界であらねばならぬのである。而もその經濟界は不斷の有機作用をなし、創造的進化の途上を走るものであらねばならぬ。（但し生命力を失つて死滅する經濟界もあるのであつて以上の立言は之と少しも矛盾はせぬのである）

吾々は以上に依つて、動態經濟の見方は概念や斷定を離れて全的に有機的に創造進化する經濟界として經濟を見るにあると云つたのであるが、然し、斯る見方は常に根本をなす一つの要素を必要とする。夫は何であるかと云ふと、夫は即ち「意義感」これである。是れ一個の現實在としての充分なる意義を感ずることなくしては如何に經濟をば概念や斷定から離れて生ける有機體として純粹に見ようとしても夫は不可能だからである。

そこで問題となるのはその意義如何であるが私は夫をば人類生活向上と云ふ經濟本來の職能に求める。そして斯る職能を中心として經濟を見るにあらざれば經濟を動的に生的に見ることは全く以て不可能なり、と考へざるを得ぬのである。若しも斯る職能感を離れて慢然と經濟を動的に見るな

らば夫こそまことまりの附かぬ變化としてしか經濟は見られぬことになるからである。

カッセルも景氣や發達の如き動的なる經濟を見る爲めにはその見方をば演繹から歸納へと變へて經濟事情や經濟統計をそれ自體の本質からじて見に行くことが必要であると云つて居るが同時に彼は斯る見方は常に貨幣經濟のメカニズムから離れて厚生經濟と云ふ社會的必要に基けねばならぬと云つて居るではないか。

四　經濟動學の性質

以上述べたるが如き經濟動學は理論でもなければ政策でもないのである。云ふを得可くんば、寧ろ、その合の子である。その中間範圍に位するものである。是れ、經濟動學上の理論は、半ば、理論であり、半ば、政策だ、とも見られるからである。何故、そう見られるか。そも〳〵そんなものが、可能であるだらふか、と云ふと、確かに、夫は、可能である。今一例を擧げて夫を申すならば例へば景氣論の如きが、當に、夫に當るものであつて、即ち、景氣論は、一面、經濟理論を含むと同時に、他面、經濟先見や、經濟合理化の如き政策の分子をも多分に含んで居るではないか。然らば何故こうなるのか、と云ふと、是れ、景氣論に於ては、原因結果の關係は、澤山に取扱はれて居るけれども、その原因結果の關係は、常に、條件の制約の下にあるからである。今迄の經濟學者達は、「結局に於ては」(In the long run)と云ふ言葉と、「他の事情にして同一ならば」(The other things being equal)と云ふ言葉とのこの二個の言葉でもつて、條件の制約を一掃して、純然たる原因結果の關係を論じたので茲に純理論が出來上つたのであるが、經濟動學にあつては、以上の如き條件の制約の一掃をばしないで、條件の制約のあるがまゝに原因結果の關係を、極めて、具體的に捕捉して、夫等をば更に、澤山に集めて、有機化せんとするものであるからして、勢ひ、そこには、「抽象的な因果關係」即ち「理論なるものはないが、その代りに、具體的なる因果關係の綜合體である處の、有機關係や有機作用や、定型や、傾向や、律動などはあり得る譯である。そして、是等は、一面、理論的であると、同時に、他面極めて、政策的であつて、「現實としての經濟」の本質に觸れたもの。從て、また、經濟政策の基礎附けたり得るに至るのである。經濟動學は、實に、斯る條件に制約されて居る現實的なる經濟的因果關係の綜合化、有機化による經濟有機體の認識を目的とするものである。反之、從來の經濟學にあつては、現實に、吾々に與へられて居る處の「經濟界」即ち「經濟有機體」をば、分析致して、幾多の條件の制約なくしても考へ得られるような經濟的因果關係だけを抽出し來り、夫等を以て經濟學を組織せんとして來たのである。處が、不幸にして、經濟そのものが已に、爭はれざる現實的存在である爲めに、以上の如き「抽象法」では、條件に制約されざる處の純然たる因果關係は、之を入手することが出來ても、その代りに、その因果關係の含む處の經濟的色彩が大變に貧弱なものとなつて、その因果關係らしくなくなると云ふ欠點が起つて來たのである。近頃經濟學が、概念の遊戯に過ぎない、との批難の聲の高まれるのも、全く、以上の如き「抽象法」では、條件に制約されざる處の純然たる因果關係は、之を入手することが出來ても、その代りに、その因果關係の含む處の經濟的色彩が、大變に貧弱なものとなつて、その因果關係は經濟的因果關係らしくなくなると云ふ欠點が起つて來たのである。近頃、經濟學が、概念の遊戯に過

ぎない、との批難の聲の高まれるのも、全く、以上の如き點に原因するのではないか、と思はれる。

そこで私共は、條件の制約を去つて、純然たる因果關係を求めて行くにつれて、漸次その求められたる因果關係の經濟的色彩の薄れて行くと云ふ點から見て、經濟の理解は、抽象法に依つては得らる可きではなく、却つて、その反對に、條件に制約されて居る處の無限無數の個別的なる因果關係をば、更に、有機化することに依つてのみ得らる可きであり、然るときに、吾々は、始めて、經濟の本質に觸れ得たる處の經濟學に達し得るのだ、と思ふのであつて、經濟學は、實に、斯るものである。從つて、經濟動學にあつては、經濟界の有機作用をよく、理解して、經濟理論や、經濟政策の基礎を示すが目的となる。

然るに、從來は、純理論と純政策、即ち、理論を實踐との間に、斯る「作用」の理解と云ふ、中間範圍のあることを看過せる人々が甚だ多かつたのであつて、從て、經濟動學と云ふと、直ちに、經濟生活に關する動的認識を目的とするものでもあるかの如く考へられる傾向が多かつたのである。

乍然、之も、決して、無理ではないのであつて、それほどに今迄は政策と理論との間に「作用認識」の中間範圍のあることが看過されて居つたのである。現にカントですらも「その認識は二樣にその對象と關係させられることが出來る、對象及びその概念を單に限定するか或はまたそれを實現するかである ihre Erkenntniss auf zweierlei Art auf ihren Gegenstand bezogen werden, entweder dieser und seinen Begriff blos zu bestimmen, oder ihn auch wirklich zu machen, Die erste ist theoretische, die andere praktische Erkenntniss der Vernunft. と、その第二序文で云ひ、「限定と實現」「理論と實踐」と云ふ二つの群れに理性認識を分けて居るではないか。

然し、私は、カントの分けた「限定と實現」「理論と實踐」との中間に、限定とも實現とも附かず、理論とも實踐とも附かぬ處の中間範圍のあることを認めるものである。然らば、夫は、何であるか夫は、實に、作用の認識に外ならぬ。而して、斯る經濟作用の生けるがまゝの認識を任務とする一科學を呼んで、私は、經濟學と命名するのである。而して、斯る科學に依てのみ、初めて、吾等の經濟生活は指導され、統制され、組織化され、合理化されて、その實が擧るのであると思ふ。謂ゆる經濟先見學でも、經營經濟學でも、皆、夫等は、この種に從屬するものに外ならぬと思ふのである。

但し、作用認識には、二種ある。一は、表象に依る作用認識であつて、小說は斯る分類に屬するのである。他は、概念に依る作用認識であつて、一般の社會學は、この分類に屬する。而して、此の概念による作用認識は、全體觀と職能觀と作用觀を通じて、合目的性的認識に達することを目的とするものであつて、從つて、そこには、概念限定の場合に見るような因果觀や法則觀はないけれども傾向觀や組織觀や作用觀や職能觀などがあり得るのである。また、概念限定の場合には、因果關係が認識の對象となるが、概念に依る作用認識の場合には、相互關係の認識が對象となる。近頃、獨逸では、部分認識(Zeilerkenntnis)と全化認識(Gesamt-Erkenntnis)のと云ふ言葉が流行して居るが、此の全化認識と云ふのが、私の云ふ概念的認識に稍近いものかも知れぬ。而して、斯る合理化認識又は、概念的作用認識こそは、これからして、吾々の研究し行かんとする景氣變動論や發展運動論の基礎をなすものでなければならぬ、と思ふ。